

ガジュマルからの声は……

伊仙町立阿権小学校 四年 中 満月

「ねえ、ねえ。いっしょに遊ぼうよ。」

どこからか聞こえてくる小さな声。ここは、阿権の三百年ガジュマルが、まるでかいじゅうのようにうでをのばしている小道。みっちゃんは声の主をさがしてキヨロキヨロ。すると、ガジュマルの木の上におかっぱ頭の女の子が、ちょこんとすわっているではありませんせんか。

「ねえ。わたしとカタツムリの朝食いしよう。」

という女の子に、みっちゃんはびっくり。

「えっ。わたし、カタツムリなんて大きい。」

「じゃあ、わたしとすもうで勝負しない。」

「すもうなら、わたしもとくい。男の子にだってまけたことないんだから。」

と、二人はすもうをとることにしました。

「はっけよい、のこった。のこった。」

女の子がみっちゃんに体当たり。みっちゃんも負けずにおしたり引いたり、いい勝負です。みっちゃんが女の子をたおしました。

「ヤッター。勝った、勝った。」

「キー、くやしい。もう一回勝負。」

と女の子。負けても負けても勝負をいどんでくるのです。結局みっちゃんの全勝で、女の子はとてくやしそう。そうしているうちに、もう夕ぐれ。二人は明日も遊ぶやくそくをしました。すると、女の子はガジュマルの木に上り、すがたが見えなくなってしまうました。

家に帰ってから不思議な気持ちのみっちゃん。お母さんに今日の出来事を話しました。お母さんは、にっこりして言いました。

「それはきつとケンムンよ。実は、母さんも昔ケンムンとすもうをとったことがあるんだ。もちろん全部勝ったけど。でも、大人になるといつの間にかケンムンは見えなくなってしまうだけどねえ。」

次の日、みっちゃんは見てしまいました。ガジュマルの木の上でカタツムリをおいしそうに食べているケンムンを。口がとんがっていて、まるでさるのよう。頭にはお皿もあつて、カップのようにも見えます。

「ねえ。今、朝ごはんの時間なの。」

と、みっちゃんが声をかけると、ケンムンはあわててきのうの女の子に化けました。それを見たみっちゃん、

「大丈夫だよ。やっぱり君はケンムンだったんだね。」

「どうして女の子に化けたの。」

「あああ、ばれたか。ざんねん。阿権の子どもたちはみんな、こんなぼくのことをこわがって遊んでくれる子なんていないんだもん。君はぼくのこと、こわくないの。」

「こわくないよ。母さんからケンムンの話を聞いたし、すもうもおもしろかったよ。」

「ああ、よかった。君はぼくの友だちになって、これからも遊んでくれるの。」

「うん。もちろん。他の友だちともなかよくなれるようにさそってみることにするよ。」

さっそくみっちゃんは、友だちのまあくん、かつちゃん、あいちゃんの三人を連れてガジュマルの木にやってきました。

「おおい、みんな遊びに来たよ。」

と、みっちゃんがよびかけると、すがたをあらわしたケンムン。すると、それを見た三人は、

「ギャー。ケンムンだ。にげる、にげる。」

とさげんで、いちもくさんににげていきました。ケンムンは、がっくりとかたを落として、

「ああ、やっぱりね。きつとぼくは、阿権の子と友だちになることなんてできないんだ。」

と、さびしそうにつぶやきました。ケンムンのさびし

い気持ち、みっちゃんにも伝わってくるようでした。みっちゃんが聞きました。

「どうして、阿権の子たちは、君のことを怖がっているの。」

「以前、子どもたちがこの大事なガジュマルを切ろうとしたんだ。だから、ぼくははらが立っておどかしてやったんだ。」

「そんなことがあったんだ。でも、このままじゃいやでしょ。何とかしなくちゃ。」

阿権に大型台風が近づいたある日。家々の屋根が飛ばされ、川があふれ、あちこちで木がたおれました。

そんな中、神社の鳥居がたおれて、ちかくにいたかつちゃん、今にも下じきになりそう。それを見ていたケンムンは、ビューンともものすごい速さでとんでいき、ガツチリと鳥居の下にもぐりこみました。

「グゲグツ。グゲグツ。グゲグツ。」

ケンムンはおしつぶされそうになり、足が地面にうまりました。でも、ケンムンはあきらめません。近くで見えていたまあくんも、あいちゃんも、みっちゃんも力をかしました。そしてやっと、かつちゃんを助け出すことができました。そしてやっと、かつちゃんを助け出すことができました。みんなはケンムンに言いました。

「ありがとう、ケンムン。君は命のおん人だ。いつも君は、ガジュマルの上から阿権のみんなを守ってく

れていたんだね。」

ケンムンの目には、キラリと涙が光りました。

三百年ガジュマルの小道。今日も阿権の子どもたちが歩いてくると、どこからか、

「ねえ、ねえ、いっしょに遊ぼうよ。」

という、だれかさんの声が聞こえてくるのです。

